参考資料２

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」検討・準備グループにおける主な意見

【検討・準備グループ（第１回）＜平成２８年５月１９日＞】

〔英語４技能評価〕

○　資格検定で賄えば英語試験は必要ないという先生はいる。英語試験の学内実施にこだわるのは英語以外の先生の方が多い。

○　４技能実施が前提ということになっているが、平成３２年度からすぐ導入しなければならないものでもない。

○　その場合、４技能を実施しないということについて、周囲に受け入れられるかどうかが重要である。プロセスを踏んで平成３６年度以降実施という整理もあり得る。

○　民間委託の場合は、センターのチェック体制がかなり大変になるのではないか。

○　大学における資格検定試験の活用状況を押さえなければならない。そもそも同一日一斉実施でスピーキングを実施することは難しい。

○　大きな流れとして高校の評価も大きく変わりポートフォリオ活用が進めば、試験だけがすべてということでもなくなってくる。これは英語だけの問題ではない。

○　英語４技能を議論している経緯は、入試で１、２技能であると高校教育でも１、２技能を重視せざるを得ないという英語以外の先生からの依頼が大きかったことがある。

○　英語の評価結果については、世界的に通用するものであった方がよい。センターや民間委託で実施するよりも資格検定試験を活用した方がよい。資格検定試験であれば世界的にも通用するし、コストも削減できる。

○　資格検定試験活用は大賛成である。資格検定試験団体の意識も変わってきている。そのうえで、大学が資格の国際通用性の確認や入学者のフォローアップなどを行い、どんどん良くしていけばよいのではないか。

○　各団体の検定料の開きも大きく、そのまま活用することは難しいのではないか。どういう能力を測りたいかも重要である。

○　入学者選抜となると資格検定試験の質をコントロールする体制は必要である。

○　検定は選抜とは異なる。ある程度方向性や必要なスペックを示さないといけない。それぞれ特性を持っている民間検定試験をどう整理していくか。センターでフォローすることは必要かもしれない。

○　民間で実施した場合、リスニングとスピーキングをセットで実施できるか検討する必要がある。

○　活用する高校や大学の意見も重要である。

○　検定試験の点数化はやめた方がよい。検定試験結果の活用については個々の大学の判断に任せた方が良い。

○　リスニング、スピーキングは同時実施が可能か。ヘッドフォンなどを活用すれば一斉実施もできるのではないか。

【検討・準備グループ（第２回）＜平成２８年７月１９日＞】

〔英語４技能の評価の実施形態について〕

○　セーフティネットは当面でよいのか。全面的に民間に任せることに不安があるなら恒久的にセーフティネットはあった方がよいのではないか。

○　ＣＥＦＲとの関係で、英語の結果を素点ではなくレベルで出すのであれば、識別力の問題で学力の低い私大にも対応できるよう、Ａ１・Ａ２は細分しなければならないと思う。また、グローバルに対応できる資格検定試験を活用するのか、学習指導要領に準拠した資格検定試験を活用するのか、重点を置く内容を決めておいた方がよい。私大によって考えが異なるので、場合によっては使いにくくなるリスクもあると思う。リーディングとリスニングのみの選択肢も残しておいた方がよい。

○　４技能をしっかりやっていくという話なのに、２技能のみの選択肢を残しておくのには違和感がある。結果的に、高校の授業が「読む」「聞く」だけで終わってしまうのではないか。

○　スピーキングとリスニングを民間に任せて、ライティングとリーディングを自分の大学でしっかりやるということもあり得る。

○　英語も各大学のアドミッションポリシーに基づいてやるべきと思うが、今回の改革では、４技能は推進していくというスタンスであるので、何らかの形で担保されるべきである。

○　セーフティネットに関して、いつからなくすかという話はここでは難しい。やっていきながら考えていくしかない。

○　当初からスペックをきちんと示すことを前提に、英語４技能の資格検定試験を活用する方向でよい。できるタイミングで取り組むべき。

○　５０万人以上が受験し、離島や僻地も抱えていて、色んなリスクの問題もある。固定化してしまわないように、どういう条件がそろえば英語４技能の資格検定試験を活用できるかを考えていく必要。

〔記述式の導入について〕

○　数学と国語が一緒に語られているが、数学と国語はずいぶん異なる。数学であれば、数式だけ書かせても、考えなしにはそこにたどり着かないので、部分的な答えを見ても思考の過程が見て取れる。国語の方は、考え方を表さないといけない。

○　マーク式も含めた前倒しの発想は全くなかった。現行のセンター試験の日程は、大学入試と、高等学校教育への影響とのギリギリの日程であそこに置いた。それを踏まえたときに、マーク自体を１か月も早めるということは考えられない。学習指導要領に従ってやっていたら間に合わないという状況を文科省自身が作るというのは理解できない。

○　高大接続は、高校の授業を変えようということが主な目的。そういった意味で、高校の授業を台無しにしたらまったく意味がない。最低マークは１月に行うべきである。記述式も 12 月下旬がギリギリの日程である。対案として、採点に高校の教員を使うという方法はあり得る。

○　前提について、記述式の問題を出すためには、この時期でなくてはならないとなっている。こういった力をつけよう、そしてその力を測るためには、この時期だという見せ方を

すれば、また話は違うのかと思う。

○　現行通りに、授業をし、試験をすると、1 月という考えになる。発想の転換をして、高校教育の質と、大学教育の質、そしてそこを接続する選抜試験として、一体的に考え、柔軟に議論しないと変わらない。

○　大学側もタイトなスケジュールの中、非常に多様な入試をやっている。機械的にこの時期に移せばいいという議論だと納得されないと思う。

○　このままの日程で行くと、この試験を使える私大は増えない。個別入試を特別丁寧にやるとなると、受験生側は、１大学か２大学位しか受けられず、物理的に無理である。この日程でやるならば、個別入試の選抜を共通テストの相当前に始めて、最後に学力担保として共通テストを使うとかしか方法がない。私学を必須にするのは相当厳しい。

○　公立大は中期日程もあり、かなり時間が限定されているので、どこにシフトするかによって、受験に対する影響がある。手間暇かけて入試をやるとなると、規模が小さいので、対応できるか心配。どこの大学も、数学と国語の教員はこの時期非常に大変で、出題あるいは採点をしているので、ほぼ全員が関わる。公立大学の場合は、人的に余裕がないので、もし採点者として人を出せとなると、大学としても非常に厳しい。

○　大学によっては規模別、あるいは専攻別などによって対応が変わる可能性がある。もう少し細かく見ていかないと、線を引いたとしても合わない可能性があるので、もっと細かい情報を入手して整理すべきではないか。

○　ＡＯや推薦では、最後に学力担保として使えるかもしれない。

○　どういう問題で、何を問うかが重要。自分で言葉を出させるかを見るのであれば、特定の時期とする必要はないのではないか。やはり中身が分からないと何とも言えない。

○　センター試験までにすべて履修するという考えが、以前話題になった未履修の問題を生んだのだと思う。１月の中旬だって、すべてが終わっていることにはならない。今までの出題の仕方がよかったという考えから始めると、何も変わらない。出題範囲の明確化が重要。高校教育への影響というのは、少なくとも、この試験の範囲を出すということを決め、その時期によって試験の出題範囲が変わらなければと思う。そうしなければ、高校教育も変われないと思う。

○　大学全てを９月入学にすべきである。高校教育が終わらないうちに試験をすることがそもそもの矛盾である。